

YOUは何しに アメリカへ？

川村 幸子（高36回入学～37回卒）

今から約40年前のこと、長野県でも屈指の過疎村浪合に生まれ育ち、高校3年の夏から1年間、アメリカの高校へ留学した女子生徒がいた。『YOUは何しに日本へ？』というテレビ番組をもじり、今、私はその子に呼びかけてみたい。「YOUは何しにアメリカへ？」と。

YOUは、なぜそんな山奥からアメリカへ？

君はただ、英語が大好きで、平凡な中学生に過ぎなかつた。そんな山奥にて、君はなぜ高校時代にアメリカへ行きたいと思つたのだろう？

中学時代の恩師は、英語教育に熱心な若い女性教諭だつた。ひたむきに英語に取り組む君の姿に、かつての自分自身を重ねたのかもしれない。「高校か大学で、アメリカに留学するといいよ。私は出来なかつたからこそ挑戦してほしい」。突然の「留学」という響きは、とて



●かわむら・さちこ
阿智村浪合（環境省認定「日本の星空の村」）出身。高3の夏AFS交換留学生としてアメリカへ。ストレスケアカウンセラー。世田谷区三軒茶屋にストレスケアサロンを開室。心と体を癒す技術を伝えている。

つもない夢物語に感じた。でもその「夢の種」はその時、君の無意識の中に、密やかに埋め込まれた。
君の生まれ育つた浪合村は、山奥過ぎてラジオの電波すら入らなかつた。君はNHKラジオ英会話やFENを聴くことも叶わない環境に生まれたことを呪つた。仕方がないのでテキストのテープをダビングしてもらい、何度も聴いて丸ごと暗唱した。小中一貫してわずか9名の同級生。先生方との関係は親密で、一人ひとりの個性を大事に育てくれた。そんな少人数教育のメリットと、山間部ゆえのデメリットを受けつつ、君は、のびのびと中学時代を送つた。

やがて浪合中学校から飯田高校へ進学した君は、まずその学生数に圧倒された。浪合村の人口より多い「千余の学徒」がいる大海に投げ出された井の中の蛙は、瞬く間にその波間に飲まれていつた。英語以外は汎えない成

績だったが、高校2年の秋のこと、英語教諭でクラス担任のY先生が「AFSという公費留学制度があるよ。試験を受けてみないか?」と、高校留学の扉を開いてくれた。2人の恩師の存在がなければ、君の「夢の種」は高校時代に芽吹くことはなかつただろう。

アメリカ留学奮戦記 ～月のパイのお話

かくして、1983年高校3年の夏、君は留学先のアメリカ合衆国・メイン州へと旅立つた。17世紀に英國の清教徒たちが、メイフラワー号に乗つて辿り着いたのが、アメリカ合衆国発祥の地、ニューライングランド。メイン州はその6つの州の最北にあり、その先はもうカナダだ。

成田空港からカリフォルニアへ、乗り換えて東海岸のボストンへと大陸を横断。さらに小型プロペラ機に搭乗して、ようやくメイン州へ到着。低空飛行の窓から眼下に広がる光景は、見渡す限り緑の大地で、マッチ箱のよう

に可愛らしい白や赤や水色の家が点在していた。そんな絵本のような世界から、君の異国での真新しい一頁は始まつた。

アメリカのハイスクールは9月から始まる。日本の高校と大きく異なるのは、卒業に必要な単位を自分で選択するカリキュラム制度である。「何でも見てやろう」と

意気込んだ君は、難易度の高いレベルAの科目と、放課後の部活で、ぎつしりの時間割を作つた。しかし渡米したての貧弱なヒアリング力では、到底理解が追いつかない。AFSプログラム担当の先生が「授業はどう? ちゃんとついていけている?」と気にかけてくれたが、心配をかけたくない余り「大丈夫です」と答えてしまつた。しかし大人の目から見れば、無理をしていることなど、一目瞭然だつただろう。見かねたホストファーザーが、君を呼び、ゆつくりと一言づつ、話を始めた。

「月のパイの話をするね。君は、月に来ている。初めて見るものばかりで、興奮している。月のパイが、目の前にある。見たこともない、とても大きくて、とても美味しそうなパイだ。君は、全てを食べたいと思い、かぶりついてみたけど、どうにも大きすぎて、とても食べきれない。そんな時は、どうすればいいと思う? カットして、ひと切れだけ、味わえればいいんだよ。月に住む住人は、一度に全部を、平らげることが出来るかもしれないが、君は違う。せっかく月に来たんだから、無理して、全部食べようとして、消化不良を起こすより、ひと切れだけを、じつくりと、味わえればいいんじゃないかな」。

君はようやく自分に何が起きているのかを理解した。自分のキャバオーバーを認めることや、授業のレベルを

下げることは「負け」だと思い込んでいたのだ。翌日、授業レベルをCに下げ、英語のハンディを感じなくてすむ実用的な科目（家庭科、コンピュータ、タイピング等）に変えた。この時点で、無駄に多すぎたプライドや、「頑張らなければいけない」「弱音を吐いてはいけない」という、優等生にありがちな思い込みを手放せたことは、その後の君の成長の一助になったことだろう。

メイン州の冬は長く、深い雪とグレーの空に閉ざされる。最初のホストファミリーとぎくしゃくし、年明けにチェックをした。後半の家族は年の近い長女と、フレンドリーな母親のおかげで君はリラックスしたのか、ようやく気負いから抜け出せるようになった。新年が過ぎると、溜まつた水が勢いよく流れ出すかのように君は突然、英語が話せるようになった。

雪解けの春。部活のテニスで真っ黒に日焼けし、ハン

バーガーとアイ
スクリームで

見事に10キロ以上

太った君は、身

振り手振りのみ

ならず、見た目

もたくましいア



前半のホストファミリー

メリカンガールに変貌した。そして季節は巡り、緑が美しく輝く夏が来ると、無事に手にした卒業証書を1年間の留学物語の最後の頁に綴じて、君は意氣揚々とメイン州を後にした。



卒業式

帰国後の40年間～挫折と軌道修正の日々

帰国した君は、高3の2学期から復学した。将来は、日本語教師になつて青年海外協力隊にチャレンジし、世界を飛び回るうという未来図を描いた。大学を卒業し日本語教師の現場に出たが、授業の準備で睡眠時間が3時間という日々が続き、体調を崩した。結婚を機に退職した。高校で留学し、英語を活かすキャリアへ……という予定路線からこぼれ落ちてしまつたと感じた君。それは人生初の挫折だった。

この体験から自己不一致が生じると、人は不健康になることを知つた。心と体の関係について関心を持ち、学ぶうちにストレスケアという分野に出会い、現在に至る。

後半のホストファミリーとは手紙やメールで細々と交流は続いていたが、お世話になつた恩返しをする機会もなく、心は曇りがちだった。

しかし事態は一転、ホストマザーから「2018年9月に TOKYO へ行くわよ!」という仰天のメールが届く。数日間の滞在ではあつたが、富士山、はとバス、皇居、根津美術館、焼き鳥、懷石料理と、日本を目一杯楽しんでもらつた。40年近い歳月は、「30代の両親と18歳の娘」から、ワイングラスを手に語り合える「70代と50代の大人同士」と関係を熟成させていた。「こんなことがあるのだろうか……」。錆びついた英会話力を総動員し、君は突然の白昼夢のような出来事に陶酔した。このような形でささやかな恩返しが出来たことに感謝しつつ、君の心は18歳の日々へと戻つていった。

YOU は結局、何しにアメリカへ？

「もう一度、話を4年前に戻そう。帰国間近の頃、

君はハイスクールの同窓会からスピーチを頼まれた。It takes both the sun and rain to make a rainbow.」という英語の諺を引用し「私の留学生活は、前半は土砂降りで

したが、後半には太陽が降り注ぎました。1年の終わりを迎えた今、私の眼前に広がつて見えるのは、美しい虹

です」と結んだ。そ

の時の「虹」とは、多少の英会話力、異文化交流体験、自己信頼感、出会った人たちへの感謝の思いなどだろうか。

あれから40年近く年月が流れた。キャ

リアの挫折、伴侶の

過労、体調不良、大震災、コロナ禍……君の人生に降つた多くの「雨」。同時に、たくさんの温かい光に支えられてきた。結果として天職と思える仕事に巡りあつた。今までの人生は、全てが愛おしく、全てが必然で、無駄なものはなかつたのだ。40年前の虹はとつくに消えていたが、数年前のホスト両親との再会で、君は自分の人生に、再び淡い虹がかかつたように感じた。

虹を見た時、ひとは何を感じるだろう。その神々しさに、新たな希望や勇気を感じるのはなぜだろう。

雨と太陽がなければ、虹はかかるない。

そんな人生の本質を学ぶために、君は多感な10代に、アメリカへ行つたのかもしれない。

(完)



後半のホストファミリーが来日